

第5回運営協議会 アンケートでいただいた意見

《事業全般》

- オンラインでもラジオを聴くような気軽さで参加できるイベントが増えている。夜の開催で、顔出しはせず、質疑はチャットのみでやるという形で、ゆるく学べる場もあっていいと思う。
- ターゲットごとの周知も考えていく。若者と高齢者とでは周知の仕方が違う。
若者：SNS(センター利用の若者とともに)発信、高校3年生への情報提供～つながる学びの場
ママさん：SNS、こどもセンターへの掲示、マルシェやイベントへの参加告知
シニア：市内各市民センターやふれあい館、図書館、地域密着型病院などへのチラシ、ポスター掲示
- YouTube にアーカイブ化した講座の動画やイベントの様子が伝わる動画、イベント等で市民から募集した動画等を置く。再生回数が伸びれば将来的に収益にもつながる可能性がある。そうすると、町田市にとってシティプロモーションや経費削減にもなる。
- 講座にインターン制度を入れるのはどうか。気軽に体験するとか、手伝ってみるとか、少しずつ広く浅く知って、自分の興味がどこにあるのか知る入口を作る。案にあがっていたコンシェルジュ機能を活用して、本人の嗜好と既存の講座をつなぐことができるのではないか。すでに開催されている講座の主催者・利用者に「体験可能」「見学のみ可能」「参加不可」のようにアンケートを取っておくと良さそう。
- 新しい講座をみなで考えるならば、稼働率が高い生涯学習センターの効率的な利用の方法も考えながら、地域社会資源の活用を積極的にすすめていきたい。ただし、地域のニーズ把握を気軽にできる方法も考えたい。
- お店とのコラボ企画はおもしろく展開できそう。例えば、アパレルさんにコーディネート講座をやってもらう、カフェに盛り付け方講座をやってもらうなど。参加者が若者向けでもあるが、さらに講師も若い方がこられる場合、講師側にセンターについて知ってもらえるのでは。
- 生涯学習センター・公民館は長い地形の町田市に1か所しかありません。生涯学習センターで学んだ人が、学んだ同じ講座を町内会館や自治会館、コミュニティセンターなどで開催することで近くの方が参加し学びのコミュニティーが広がっていくと思います。会議に参加していて、同じ人がリピーターとなり参加者の輪が広がっていない状況があると言われていたので、何度も利用されていて生涯学習センターの講座の良さを知っている人に、ご自身の住んでいる地域で講座をやってみないかという提案を行っていくのはいかがでしょうか。すでにまちチャレなどそのように進めているとは思いますが、シニア層にも浸透していくと良いと感じました。
- 事業の体系化は、大いに評価できること。

- 事業の在り方や、スタッフ・プログラムも含めて、定期的な見直しが必要なこと。(継続する場合の上限期間の設定も必要)
- 特に、長期に渡っている事業に関しては、利用者等が主体的に対応し、センターは支援する立場となるよう、見直しを進めていくべきこと。
- 見直しの実施に当たっては、取り残される人々を作らないことが肝心だと思います。(IT化、デジタル化を推進するに当たって、デジタル・デバイドの問題をセットで考えないといけないのと同様に)

《学びの裾野を広げる》

- 若者向けの講座をする場合に、「机と椅子」という固い雰囲気ではなく、その講座の内容に合わせて、床にシートをひくとか、yogiboを置いておくとか、リラックスした雰囲気でする場をつくる。

《誰もが学べる環境をつくる》

- 学校に行けない子どもたちのフリースクールが各地域にそれぞれあるが、それらを横でつなぐ場の提供
- フリースクールの卒業生や、人生のすすむ方向に迷う18歳以上の子どもたちへ、社会や学校とは別のニュートラルな学びの場・機会を提供する。学校で学んできたこととは違う多様な学びを知り、興味を持って先に進めるきっかけづくりになれば…

《学びを深め、活かす》

- 人づくりの講座をするのであれば、終了後に他組織と連携してその後の活動を形にするための講座も実施するなど仕掛けがあるといいと思う。
- 連続講座の内容は魅力的だが、全12回の参加がハードルになる場合も多いと思う。オンラインで参加できる内容を数回取り込んだり、講座回数を少なくしてハードルを下げるプログラム設計にするなど工夫すると思う。
- 市民大学・ことぶき大学に関して、前回意見が分かれておりましたが、市民大学と寿大学を分けるのではなく、市民大学の中に対象が65歳以上から申し込みが出来ますやシニア向け。など対象を絞った方法は出来ないのでしょうか？
- 「市民大学事業の見直し」について
「Ⅲ 課題解決に向けた修正案」の「4. 重複事業の整理」や「Ⅳ ことぶき大学との整理・統合」
市民大学事業の見直しで、もともと趣旨も成立過程も異なる「市民大学」と「ことぶき大学」とを結びつけて論じるべきではないと思います。「『市民大学』と『ことぶき大学』を整理・統合して民間活力を導入する。」と受け取られ、せっかく「市民大学」の改革を行うのに、余分な疑念を招きかねません。高齢者を切り捨てる施策と受け取られるのではないのでしょうか。「市民大学」は「市民大学」として見直しを行い、「ことぶき大学」は「ことぶき大学」として見直せばいいのではないのでしょうか。

そもそも、「ことぶき大学」の存在そのものに疑念を持ったというか、持たれるようになったことからの事だと思いますが、東京都が補助金（税金）を投入してでも、高齢者向けの講座なり、イベントを導入して欲しいとしたのはどんな意味があったのか。それを町田市の生涯学習センターは、止めたいと言う。そして、その理由は

- (1) 両者が「〇〇大学」と名称が類似している。
- (2) 両事業の会場・開催時間帯（平日日中開催）・受講者が重複している。
土日に、障がい者青年学級が行われている。
公民館に夜間勤務の体制がなかったこと。
- (3) 担当者の重複。
- (4) 双方のそれぞれの領域に踏み込む形で均質化が進んだこと。
- (5) 「学び」の分野においては、60代、70代と40代、50代の間には明確な差異はなくなってきた。「優遇」する必要性は薄れてきている。
- (6) 高齢者特有の課題については、高齢者支援センター等の専門部署が取り組んでいる。

以上の理由から、町田市生涯学習センターは、いわゆる“ことぶき大学”を廃止にしたいという訳ですが、税金を投入してまで「高齢者向けの」という都の意向を本当に理解しているのか疑念を抱かれるのではないのでしょうか。高齢者が困難な問題に直面した時、高齢者の問題に直接向き合う専門部署ですから高齢者福祉課や支援センターに支援を求めらるでしょう。生涯学習センターは「学び」に特化した施設なのですから、生涯学習センターには支援を仰ぎに来ません。高齢者の課題や困難な問題の「気づき」や「学び」に資するのであって、具体的な課題や問題を解決する部署ではないからです。

いわゆる“ことぶき大学”（名称ではなく）は、電車で言えば女性専用車両やシルバーシートの役割を果たす役目を負っていると思います。高齢者だって、学びたいことは若い人と同じようにあると思います。高齢者のために学びのきっかけや機会を確保してあげることも大切なことだと思います。IT化・デジタル化で、例えば高齢者がプログラミングを学びたいと思っても、同じ内容を学ぶにしてもプログラミング特有の用語の理解やパソコンの操作の仕方などで若い人と一緒に学ぶのが難しいこともあります。小学生にプログラミングを優しく丁寧に教えてあげる講座というものもあります。そのように高齢者専用の講座があっても良いのではないのでしょうか。ただ、年齢をどこで区切るかは考える余地があると思います。75歳以上とか。

《学びのネットワークづくりを促進する》

- 市関係の他の団体、施設との連携・役割分担も図っていくべきこと（社協、消費生活センター等）。
- 市内に立地する大学との連携を一層進めていくべきこと（大学との連携講座の開催等）。

《管理・運営》

- 生涯学習センター、市民フォーラムにある保育室の貸し出しについて。とても良い場所があるのに市民に知られていない。また貸出が少なく空いている日が多いと聞く。町田駅周辺には小さな子を連れてお買い物をしていたりしても休憩できる場所が少なく、公園などもない。空いている日は解放し休憩スペースとして利用できるようになることで、生涯学習センターや市民フォーラムが行っている様々な事業を子育て世代に知ってもらえるきっかけになる。子育て世代が利用することで、親子で生涯学習センターを知り、子が大きくなり小学生・中学生・高校生・大学生・社会人になった時も生涯学習センターが身近に

感じ、利用しようと思うのではないのでしょうか？ 親も年を重ねていき、子育てがひと段落した時に生涯学習センターにて新たなことにチャレンジしてみようと思うのではないのでしょうか。

- 生涯学習センター全体の印象が暗いです。照明なのか壁紙なのかレイアウトなのか…。全てかもしれませんが。もっと明るく空間デザインをした方が良いと思います。また来たい！ここで学びたい！と思える環境も若い世代には大切だと思います。せっかく、手作り関係や学んだことを展示されたりしていますが、飾り方や掲示していることの告知が足りないと思います。せっかく良い情報が作られているのにもったいないです。沢山の人が駅周辺を通っています。立地条件も良いのですから、立ち寄りたい場所になるような空間になれば良いのにと強く思います。生涯学習センター・市民フォーラム この2か所は本当に立地が良いのに知られていないのは、広報はもちろん、空間デザインにも問題があるように感じます。
- 広報に関しては、市の公共施設内のみ情報を置いていて市民の生活の中で情報を受け取る方法が少ないと感じます。公共施設へは用事がなければ行きません。ネットによる情報も自分から見に行かなければ受け取れません。ネットから情報を受け取るのも苦手な方も多くいると思います。市内の事業者や病院などと連携を取り、生活の中で人が動いているところで情報を受け取れる仕組みづくりが大切だと思います。
- 管理運営に関しては、「一部事業の業務委託」に止まらず、近い将来の「指定管理の導入」も含め、専門性を有する民間事業者の活用をより広範に進めていくべきこと。
- 公民館と生涯学習センターの名称の併用は市民にわかりにくいため、過去の経緯にこだわることなく「生涯学習センター」への一本化を検討すべきこと。
- 「民間活力の導入（活用）」は必要なことだと思います。しかし、どういう組織体に事業の管理なり、運営を委託するのが一番の問題だと思います。（センターと同様なノウハウを持った組織の共同の組織体）。しかし、議論を進めるに当たっては、効率・採算・費用対効果とかいう視点が前面に出たような議論は避けるべきかと考えます。（イベントの夜間開催における人的リソースの問題は職員の勤務に関わる難しい問題ですが、やはり別個に考えた方が良いでしょう）。
- 名称については、もともと、ビル自体が複雑（センタービル、今は使われなくなったが109、レミィ）。「レミィ」と名を変えましたが、果たして愛着を持たれる施設になったか。ただ、余計に混乱させたか。当センターも「公民館」と「生涯学習センター」とのダブルネーミング、「生涯学習センター」の知名度が低いのは、果たしてネーミングのせいと言えるのでしょうか。愛着を持たれる可愛い名前でも施設の活動が分かるような名前があれば良いのですが、ただ可愛いだけの名前ではダメなのではないでしょうか。
- 指定管理やネーミング・ライツなどによる施設名
 - ・町田 GION スタジアム（野津田陸上競技場） 町田ゼルビアのホームスタジアム
 - ・サン町田旭体育館（旭町体育館）
 - ・和光大学ポプリホール
 - ・日産スタジアム（横浜国際総合競技場） 横浜マリノスのホームスタジアム

・味の素スタジアム（東京スタジアム） 東京ヴェルディのホームスタジアム

「日産スタジアム」や「味の素スタジアム」は別格として、野津田競技場を「ギオン競技場」とは呼びませんし、旭町体育館を「サン町田旭体育館」とは呼んではないのではないのでしょうか。ネーミング・ライツなどを考えるのは、施設の活動が市民に評価されてからのことではないのでしょうか。

- 市民に親しまれている施設は「ポプリホール」かもしれません。（「ポプリ」という名前はいいネーミングだと思いますが、和光大学としては大学名を付けて呼んでもらいたいと言っているそうです。）ポプリホールは、貸出施設、ホール、フリースペース、喫茶・軽食店、図書館や市の連絡所はないものの生涯学習センターと似た施設なのですが、時間があると一人でも、ちょっと寄ってみたくなる施設です。規模は違いますが、ポプリホールと生涯学習センターとどこが違うのでしょうか。今回の運協の議論とはずれるかもしれませんが、考えてみる必要があります。生涯学習センターも、人々が気楽に寄り合える場所であれば、いろいろな問題も解消されるものと思います。生涯学習センターも、講座やイベントに参加する以外にも、市民が気楽に集い活動できる空間になってほしいと思っています。